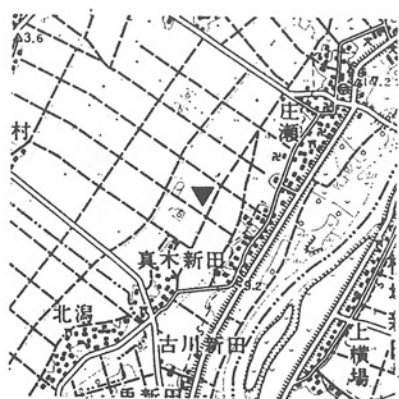


- 馬場屋敷遺跡は、大河川の自然堤防上に営まれたと考えられる集落跡で、東西二〇〇m、南北八〇〇mの広がりがあり、行政区画に








より興野遺跡、若宮様遺跡馬場屋敷遺跡の三つに区分されているが、もとより同一遺跡と考えられるものである。この地域は越後平野のほぼ真中に当り、日本最長の大河である信濃川と、その分流である中ノ口川とに挟まれた低湿地で、広義

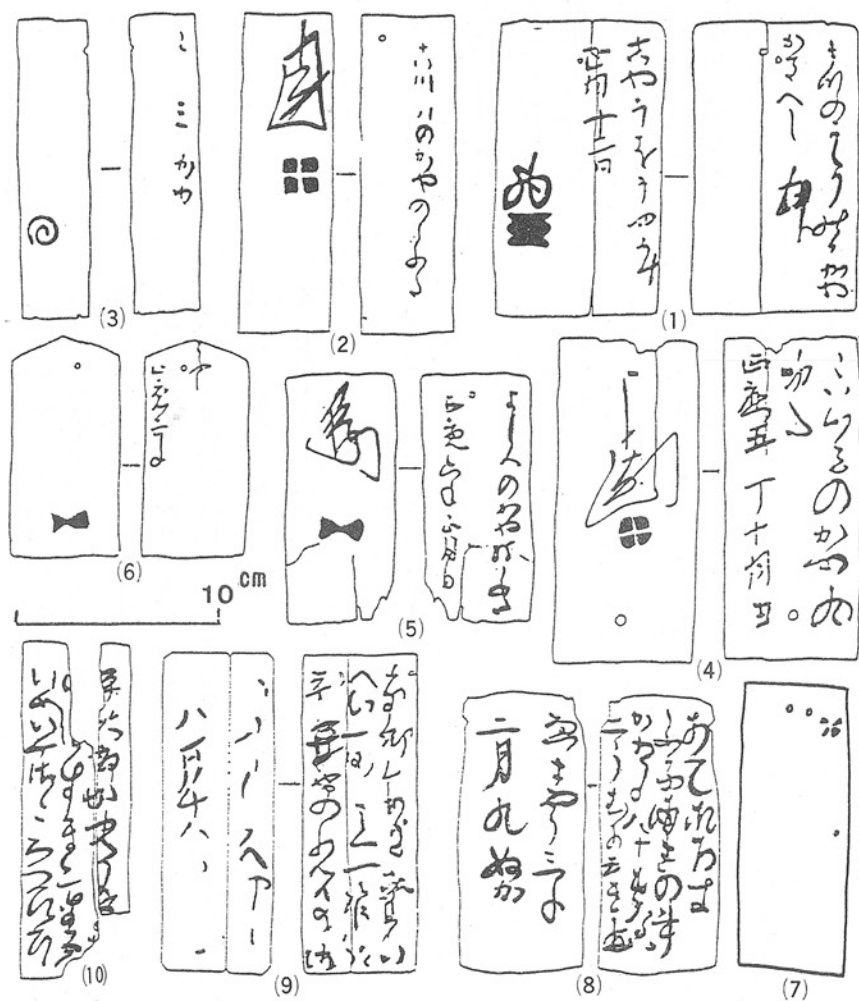
の意味の中洲とも考えられる。現地表の標高は三・五mである。

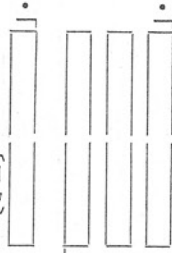

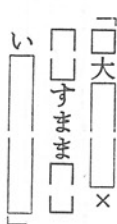
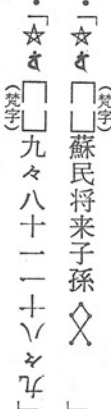
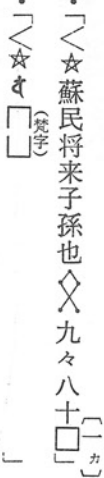
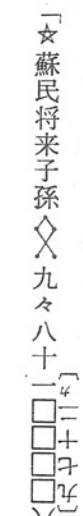





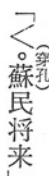








一九八三年より実施された県営ほ場整備事業に伴い発掘調査が行われ、その結果、一四世紀から一六世紀にわたる遺跡であることが判明したが、南の馬場屋敷遺跡には、さらに下層遺跡があり、その一部分を調査し、建物跡一棟、祭祀遺構四を見出した。木簡の多くは、建物跡前庭部とそれを取りまく溝周辺より出土し、呪札の一部は祭祀遺構内より出土した。

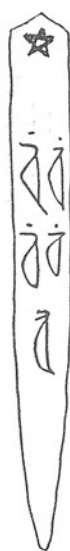
8 木簡の積文・内容

- (1) 
「^{〔古カ〕}川^{（穿孔）}のうらのゝかや^{（穿孔）}かるへし□」
- ・「しやうをう四年
正月十二日
^{（穿孔）}（花押）（焼印）」
- (2) 
・「古川^{（穿孔）}ハのかやのふた^{（穿孔）}」
- (3) 
・「^{（穿孔）}花押^{（焼印）}」
- ・「
こ^{（穿孔）}□□かや^{（焼印）}」
- ・「
こ^{（穿孔）}□□かや^{（焼印）}」
- 110×(30)×3.5

- (4) 「こい川者のかやの
ふた」
正應五年十月日
「(花押) (焼印) (穿孔)」
122×55×5
- (5) 「よしへのかやのふた
正應六年正月日
「(花押) (焼印)」
100×45×4
- (6) 「たか」
正應六年
「(穿孔) (焼印)」
87×45×4
- (7) 「あて於ろす
ふ子満きの事
かわ□□十もな□
二□む□□ (花押カ)」
122×47×4
- (8) 「あきやう三年
二月九ぬか
「(穿孔) (焼印)」
113×50×6



- (9) 
 八月十八日 
 128×45×3
- (10) 
 135×42×3
- (11) 
 250×30×3
- (12) 
 268×33×3
- (13) 
 272×27×4
- (14) 
 240×26×4
- (15) 
 175×35×3
- (16) 
 133×40×5
- (17) 
 137×25×5
- (18) 
 278×40×5
- (19) 
 113×46×5
- (20) 
 95×27×3
- (21) 
 (155)×34×3.5
- (22) 
 (75)×30×3
- (23) 
 (153)×38×4
- (24) 
 (225)×33×3.5
- (25) 
 227×35×3
- (26) 
 115×32×4
- (27) 
 115×46×4



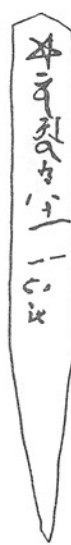
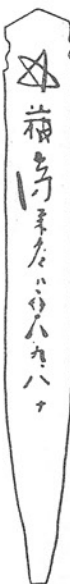
(14)



(13)



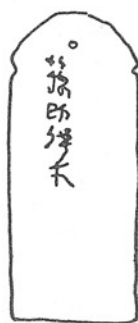
(12)



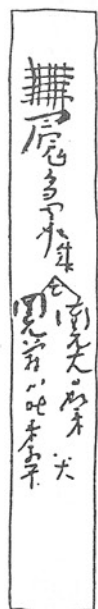
(11)



(20)



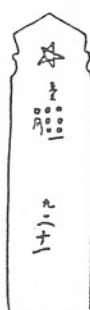
(19)



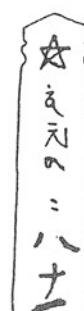
(18)



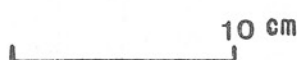
(17)



(16)



(15)



10 cm



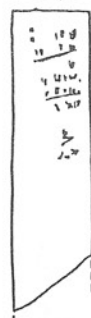
(25)



(24)



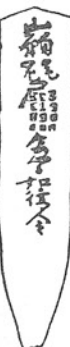
(22)



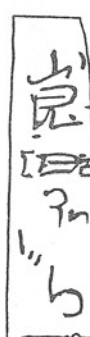
(23)



(21)



(27)



(26)

出土した木簡、及び墨痕を消失したが形態的に類似する資料は合計一〇九点を数えた。未整理のものもあるが、いくつかに分類することが出来る。

第一類(1)~(7)、それぞれ紀年銘・花押・焼印が施され、「かや」「かやのふた」等の主意が読める。これらは山札と考えられるもので、茅札即ち茅苅りの鑑札・許可証と考えられるものである。「古川」「よしへ」は地名と考えられ、近くに古川があり、吉江館がある。「ふた」は札であろう。

第二類(8)~(10)、裏面の年号以外は墨痕が明瞭にもかかわらず判読出来ないものである。これらの内の一部は付札と考えられる。

第三類(11)~(29)、形態的には数種にわかれるが総てに呪句が記されている。このうち(11)~(20)は蘇民将来呪札であり、疫病除として祭られたものであり、その他は前者の呪句や符形を見ないが、いずれも同様な災厄けの呪札であろう。蘇民将来札の蘇の文字は必ず禾と魚を左右逆に記すのを常とする。ここに多く見られる☆Ⅱ五形や△Ⅱ六星(六鬼)は蘇民将来の呪図であろう。同じく「」はバン・ア・イの三字か、バン・アークの二文字か明確に出来ないが蘇民将来を表わす種子と推測されよう。(14)・(16)・(21)・(23)・(24)・(25)に見られる日・月・口の集合は星符等にしばしば見られるもので呪句と考えられ、尸・尸は文字通り屍でありその中に厄鬼を閉込めたものであろう。(28)の𠄎は本来四縦五横で表現され九字であるが、ここでは書き誤り

であるのか、あるいは俗信で十字であったのであろうか不明である。急々如律令は漢代の公文書の用語であるが、符呪者の呪言となったし、九々八十一等は、九宮八十一神の表現で最大の願文がこめられたものであろう。

尚即ち分類出来ないものであるがここに図示した。この他断片的なものもあるが省略した。

9 関係文献

白根市教育委員会『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』(一九八三年)
川上貞雄「馬場屋敷遺跡出土の中世木簡と呪術資料」(『日本歴史』
四四一号 一九八五年)

(川上貞雄)